

頂中光明と肉髻相について

村 上 東 俊

1. はじめに

近年、カンダーラの仏・菩薩像や釈迦苦行像などに見られる肉髻 (uṣṇīṣa) の小孔の存在が Klimburg Salter と Maurizio Taddei (以下 S.&T.) の調査で明らかになり、小孔がヨーガにより頭頂から発せられる光 (エネルギー) を象徴するものと考えられ¹⁾、その後、Rhi Juhyung によって、小孔には舍利 (śarīra) が籠められていた可能性が指摘されている²⁾。

本論では、漢訳古訳經典に見られる頭頂の光明表現、特に『大阿弥陀經』(『大阿』) や『阿闍世王經』(『阿闍世』)、『六度集經』(『六度』) などに説かれる頂(項)中光明の語に着目し、ガンダーラの仏像の肉髻の孔と光明の関係について若干の考察を試みるものである。

2. 頂中光明について

頂中光明の語は、初期無量寿經の『大阿』や『平等覺經』を除いて、その光明の性質や特徴については従来あまり論じられることは無かった。この頂中光明は、『大阿』の処々に見られるが、林和彦氏によると、「頭部にある光明」と解釈され³⁾、辛嶋静志氏は、「頭頂から発する光」または「頭頂の光」と訳している⁴⁾。筆者も以前この頂(項)中光明に関して若干の検討を加えたが、「頂(項)中」に対応する語句が Skt. や Tib. の文献に見出せないことから、漢訳語特有の表現として位置づけて、「頭光表現の一種」とであると推測した⁵⁾。また、林氏は仏教美術と頂中光明との関係について、6-7 世紀と思われるバーミヤンやカクラクにある壁画の肉髻下部や⁶⁾、アフガニスタンのガズニーにあるタパ・サルダールの仏像の肉髻前部にある円盤が、頂中光明の発せられる部位であると推測している⁷⁾。そして、インドのグプタ・パーラ期の仏像で頂中光明に比定される造形は見出されないと指摘している。

(188)

頂中光明と肉髻相について (村 上)

以上、林・辛嶋両氏の頂中光明に対する見解を概観すると、『大阿』の頂中光明は、「頭頂から放たれる光明」であり、その部位は「肉髻の頂部」と考えられる。

3. 頂(項)中光明の検討

さて、頂(項)中光明は数種の用例が經典に見られるが、「頭頂から放たれる光明」のみを挙げると、『大阿』(T.12, 302b, 303a, 308b 他)、『阿闍世』(T.15, 392b)、『慧印三昧經』(T.15, 462c, 463c)、『六度』(T.3, 15a)などの限られた經典に確認できる。

『大阿』の異訳である『平等覺經』では「項」が使用されているが⁸⁾、『六度』では元・明本で「頂」の注記があり、訳語が定まっていない。これは頂と項の字が類似しているので、漢訳写本間の混乱とも考えられる。しかし、ガンダーラの肉髻の孔の殆どが中心付近に位置するものの、幾つかの孔は後頭部に位置している⁹⁾。従って、写本間におけるテキストの確認も必要であるが、訳語の相違は肉髻の孔の位置の違いから生じている可能性も存する。

『大阿』では、光明を阿弥陀仏の中心的な性格と位置づけ、阿弥陀仏の光明が最勝であることを説くために、頂中の光明の大小・優劣を説く。また、この光明は、阿弥陀仏だけのものではなく、仏・菩薩・阿羅漢にも不可欠な要素として備わっているものである。『慧印三昧經』は阿弥陀を説く經典であり、頂中光明の照射される範囲(距離)を示している。『阿闍世』では、「頂中光明菩薩」とあり、頂中光明を有する菩薩が登場することは、この光明を菩薩・阿羅漢にまで認める『大阿』に通じるものがある。更に『六度』に関しては、既に論じたことがあるが、カーピシー出土の焰肩を有する燃灯仏を表していると考えられる。このことから、頂(項)中光明は仏像の図像的特徴を表現したものと推測される。

このように、康僧会は『六度』において仏像を描写しているが、支婁迦讖訳の『道行般若經』(T.8, 476b)や『般舟三昧經』(T.13, 906a)にも、仏像の存在を前提とした記述があることは知られており¹⁰⁾、更に、支謙訳『大明度經』(T.8, 507a)にも見られることから、支讖や支謙も実際にガンダーラの仏像を見ていた可能性は高く、少なくとも仏像に対する見識を持っていたことは疑いない。

4. ガンダーラの仏像に見られる肉髻の孔

古訳經典に見られる頂(項)中光明は、先述のバーミヤンやカクラクの壁画などの出現を待たなくとも、既にガンダーラの仏像に見られる肉髻の孔が検討すべき

対象であることは言うまでもない。この肉髻の孔は現在、仏・菩薩・釈迦苦行像を合せて56体が明らかになっている。

S.&T. は、肉髻の小孔に関して5つの仮説を提示するが、実際に調査した釈迦苦行像の14体の内8体に孔が見られ、その比率の高いことから、肉髻の孔は釈迦の苦行物語に由来するものであると考え、ヨーガの呼吸法に起因するブラフマランドラ (Brahmarandhra) やサハスラーラチャクラ (Sahasrāra-cakra) を通じて光が放出される場所であると推測されている。

それに対して、Rhi は釈迦苦行を由来とする S.&T. 説を退け、仏像の聖化という視点から、肉髻の孔に舍利を籠める習慣がガンダーラに存在していたと推測している。Rhi は、ガンダーラの仏像の肉髻から実際に舍利が発見された例は無いものの、ガンダーラ様式の影響を受けた中国やホータンのブロンズ像 (3-4 世紀)、ナーガールジュナコンダの仏陀像 (4-7 世紀) やスリランカの仏陀像 (4-7 世紀) に舍利を収めていたことを指摘し、更には、経典や入竺僧等の記録を検討して、ガンダーラの仏像にも舍利が安置されていた可能性を類推している。また、この S.&T. と Rhi の見解は、光と舍利で異なっているが、肉髻の小孔に宝石を籠めていた可能性は双方の共通する見解である。S.&T. は光を強調するためであり、Rhi は遺骨の替わりとしてであるが、『集神州三宝感通録』(T.52, 411a) には、肉髻の舍利から光明が発せられる記述が見られ、7 世紀の中国の記録には舍利と光明の関係も窺える。

5. 結語

S.&T. と Rhi の研究は、ガンダーラの仏像の図像解釈に新たな光を当てるものであり、特に Rhi の所論は興味深く、肉髻に舍利を籠めた習慣の存在を十分窺わせるものである。しかしながら、未だに解決し難い問題が存するのも事実である。例えば、肉髻の孔は仏・菩薩などに確認されるが、菩薩の舍利信仰がガンダーラに存在したかは不明であること。また、肉髻の孔には大小が存在し、舍利や宝石を籠めるのが困難なほど浅く小さな孔も存在することである。この点において頂中光明は、仏・菩薩・阿羅漢に共通する光であること、また、光の出口としての孔を表現する場合、浅く小さな孔でも十分その象徴としての機能を果たせることが指摘できる。

筆者は、頂中光明の「中」をどのように理解すべきであるか疑問に思っていた。勿論、「頂の中から」を意味すると思われるが、「中」には「穿(孔)」の意味もあ

(190) 頂中光明と肉髻相について (村 上)

り¹¹⁾、「頭頂の孔の光明」が意識されて「中」を用いた可能性も考えられる。そして、肉髻に小孔のある仏像の造像と同時代の支讖や支謙、康僧会といった訳経僧により、頂(項)中光明と明確に光の放たれる身体部位が描写されていることは極めて興味深く、今後更なる検討が必要であるが、ガンダーラの仏像に見られる肉髻の孔は、その造像時期と推定される 2-3 世紀には既に光を放出する孔と理解されていたのではなかろうか。

今回の研究は、日本印度学仏教学会第 62 回学術大会における宮治昭博士の有益な御指導が端緒となりました。また本発表では、三友健容博士、岩井昌悟博士に種々の御教示を頂戴しました。各先生方の学恩に衷心より感謝申し上げます。

- 1) Doborah Klimburg-Salter and Maurizio Taddei, "The Uṣṇīṣa and Brahmarandhra: An Aspect of Light Symbolism in Gandharan Buddha Images," in *Akṣayanīvi: Essays Presented to Dr. Debala Mitra in Admiration of Her Scholarly Contributions*, ed. Gouriswar Bhattacharya (Delhi: Sri Satguru Publications, 1991), pp.73-93.
- 2) Juhyung Rhi, "Image, Relics, and Jewels: The Assimilation of Images in the Buddhist Relic Cult of Gandhāra or Vice Versa," *Artibus Asiae*, vol.LXV, no.2 (2005), pp.169-211.
- 3) 林和彦「『大阿弥陀経』にあらわれた光明の性格と北西インド」『仏教芸術』165号 (1986), p.83.
- 4) 辛嶋静志「『大阿弥陀経』訳注 (2)」『佛教大学総合研究所紀要』7号 (2000), pp.95-96.
- 5) 拙稿「燃灯仏に見られる焰肩と『六度集経』について」『印仏研』60-2 (2012), pp.83-86.
- 6) David L. Snellgrove, ed., *The Image of the Buddha* (Paris: Unesco, 1978), P. L. 147, 樋口隆康編『京都大学中央アジア学術調査報告 バーミヤン』vol.I (同朋舎, 1983), 図版 88, 142, 144, 145.
- 7) Maurizio Taddei, "Tapa Sardār First Preliminary Report," *East and West* 18, no.1/2 (1968), fig.47 等.
- 8) 香川孝雄『無量壽経の諸本対照研究』(永田文昌堂, 1984), p.173.
- 9) ガンダーラの仏像で肉髻の中心ではなく、後頭部付近に孔を有すると思われる仏像は、釈迦苦行像 1 体、仏陀立像 2 体、仏陀座像 3 体、仏陀頭像 1 体の 7 体が確認できる。釈迦苦行像については、Salter and Taddei (1991), p.76. その他のものは、Juhyung Rhi (2005), p.210, table I, 42-47.
- 10) 高田修『佛像の起源』(岩波書店, 1967), pp.425-434 他.
- 11) 諸橋轍次『大漢和辞典』vol.1, p.287.

〈キーワード〉 頂中光明, 肉髻の孔, ガンダーラ, 仏像, 古訳経典
(立正大学法華経文化研究所研究員, 法華宗(陣)宗学研究所所員)